

「次世代と描く原爆の絵」の 取り組みについて

橋本一貫

はしもと かずぬき
1959年生まれ
画家
公益社団法人 日展会員
一般社団法人 光風会理事
日本美術家連盟会員
元広島市立基町高等学校美術科教諭

一 「次世代と描く原爆の絵」プロジェクト

「次世代と描く原爆の絵」の取り組みは、平成一六年度から広島平和記念資料館が企画して始まったプロジェクトであり、広島市立基町高等学校の美術部はこのプロジェクトに平成一九年度から参加している。この「次世代と描く原爆の絵」を制作する主な目的は、被爆者の方が証言活動で話をされる際の補助資料として提示される

絵画である。それまでの証言活動では被爆者自身が描いた原爆の絵や、記録写真などを提示して状況説明を行っていたが、当時の街の状況や、衣服や物の形態などモノクロの記録写真や言葉だけでは伝わりにくい状況があった。特に若い世代に対しては想像すらできない場面が多かった。そのわかりにくい場面や状況を補完する目的で描かれたのが原爆の絵で、完成した絵画は広島平和記念資料館に寄贈され、証言者の方が修学旅行生などに行う被爆体験の講話などで使われる。もう一つの目的とし

て、制作者（高校生）は被爆者の方と共同作業を行うことで、被爆体験を継承していくことに繋がっていくのである。

広島に住む子どもたちの多くは、小さい頃から学校や色々な場所で平和学習を行っており、平和を願う思いや関心は比較的強いのではないかと思われる。ただ、思いはあっても実際の行動に結びついていないかといえば、多くの場合そうとは言えない状況である。基町高校では、平成一一年の創造表現コース（美術を専門に学ぶコース）開設当初より二年次から三年次にかけて、美術作品を通して平和への思いを表現する手段として「平和をテーマにした絵画（鉛筆画）」を手掛けてきた。そのような経緯もあり、被爆証言者の方から直接お話を聞きそれを絵画にしていくことは、美術を専門に学んでいる基町高校の創造表現コースの生徒にとって、個々の平和への意識を具現化する取り組みとしては絶好の機会であると判断した。

実際に取り組むにあたっては、「期限内に最後までやり遂げる自信」がある事と、自分の思いを自由に表現するのではなく、「証言者の方の思いに寄り添い、証言者の手となって描くことができる」という事を条件に、希

望者を募ることにした。そのようにして出来る絵は、決して芸術的な意味を持つ作品とはならないが、被爆者の方の平和に対する熱い思い、その思いに寄り添い近づこうとする努力は必ず次世代につながる意識として生徒たちに根付いていくはずであり、当時の状況を少しでも理解しやすくする資料として活用されれば、制作した生徒にとってはこの上ない達成感へと結びついていくはずであると考えた。

しかしながら、原爆による惨状を実際に経験していない高校生、ましてや指導者の私でさえ被爆体験、あるいは戦争の体験が無い中で、描く意味があるのかという思いもあった。そもそも、被爆の惨状を絵に描く時、直接被爆された方やその惨状を目の当たりにした人の描く原爆の絵ほど真に迫り見る人の心を捉える絵画はなく、高校生が原爆の絵を描く時どんなに頑張っても、ありのままの被爆の実相やその時の被爆者の感情などとても表現できるものではないと感じた。また、絵にする以上証言者の方から詳細な情報を聞き出さなくてはならず、あまりにも凄惨な話を聞くことで生徒がトラウマになってしまうのでは、という危険性も有しており、保護者あるいは外部からの否定的な反応等、このプロジェクトに参加